

第七十四回佛教史學會學術大会

# 研究報告要旨

開催日  
会場

二〇二四年十月二十七日(日)  
大谷大学 慶聞館

第七十四回佛敎史學會學術大會開催日程

日 時…二〇二四年十月二十七日(日) 午前十時～午後五時  
会 場…大谷大学 慶聞館

午前の部(午前十時四十分～十二時)

■東洋部会 研究報告 於 慶聞館K四一五

デーヴアダッタの断善根と続善根

―律とアビダルマの比較を中心に―

得度と進奉

―仏敎政策から見た唐代江南の藩鎮―

京都大学 小南 薫

早稲田大学 福島 理生

■日本部会 研究報告 於 慶聞館K三〇四

真宗における連坐像の展開について

―越前の事例を中心として―

近世天皇家の追善仏事と延暦寺・園城寺

―般舟院における中陰法要を中心に―

「宗祖の精神に還れ」と如来敎敎祖伝の作成

大谷大学 下村 優佳

京都大学 佐藤 一希

同朋大学仏敎文化研究所 石原 和

午後の部（午後一時三十分～五時）

■合同部会 研究報告 於 慶聞館K三〇四

黒谷流における造寺造仏と戒律復興

大津市歴史博物館 鯖井 清隆

清隆

——興円・恵鎮らを中心に——

京都大学白眉センター

西田 愛

〈宗教改革としての鎌倉新仏教〉言説史への新視点

——原勝郎とその後

元庵普寧書状から見る日宋仏教界の交流と博多・宋海商

国際日本文化研究センター

榎本 涉

東北大学 オリオン・クラウタウ

## デーヴァダッタの断善根と続善根

### ―律とアビダルマの比較を中心に―

京都大学 小南 薫

デーヴァダッタはブツダに反旗を翻し、僧団の分裂を企てた悪人として知られている。これまで、デーヴァダッタが歴史的にどのような人物であったかを探求する先行研究は多くあるが、説話文学としてのデーヴァダッタの物語がどのように発展、展開してきたのかについてはあまり考察されていない。

各部派の律蔵にはデーヴァダッタの物語が体系的に描かれている。特に、根本説一切有部律「破僧事」(*Saṅghabhedavastu*)には、他部派の律蔵には描かれていない物語が登場し、より発展的な内容が見られる。本発表では、「破僧事」におけるデーヴァダッタ物語を主たる考察対象とし、他の律蔵には描かれないデーヴァダッタの断善根と続善根の場面を取り上げる。善根 (*kusalamūla*) とは、一般に三善根 (無貪、無瞋、無癡) を指し、善なる心や行為の根本となるものである。断善根とはその善根が断絶されることであり、続善根とは善根が再生されることであるが、これらの定義を理解するために、説一切有部のアビダルマ論書における断善根と続善根の議論を確認する。そのうえで、律とアビダルマの比較によつてその関係を考察し、「破僧事」におけるデーヴァダッタ物語の構造や特徴を明らかにしようとする。

## 得度と進奉 — 仏教政策から見た唐代江南の藩鎮 —

早稲田大学 福島 理生

本報告は、唐代藩鎮体制下における江南の仏教政策を闡明すべく、代宗・徳宗期の江南諸藩鎮が行った得度に焦点を当て考察するものである。

唐代藩鎮体制下では、唐朝・藩鎮ともに盛んに仏教政策を行っていた。かかる仏教政策のうち、注目すべきは得度政策である。唐代では得度は制度化され（度僧制）、仏教統制の根幹となっていた。そのため、唐代の仏教政策を検討する上で度僧制の運用は無視できない。

藩鎮体制下の得度事例は、代宗・徳宗期の江南に大量に見られるが、従来その要因は不明であった。かかる得度隆盛の背景には、当時の江南やそこを支配した藩鎮特有の問題が関わっていると考えられる。当時の江南は唐朝にとって重要な地域であったが、従来の藩鎮研究では、河朔三鎮が考察の中心とされ、江南の藩鎮は顧みられることが少なかった。江南の藩鎮の一端を究明するためにもその仏教政策を検討する必要がある。

そこで、本報告では、代宗・徳宗期の江南における仏教政策の実態を考察した。

まず、当時の江南が唐朝の財源地であり、藩帥は中央から派遣された文官であったことを確認した。次に、江南の藩鎮の仏教政策全般を藩鎮ごとに検討し、いずれの藩鎮でも仏教政策の中心は、得度を行うこととそのため戒壇設置にあったことを示した。そして、藩鎮が得度を行っていた背景に迫り、得度は金銭授受が伴うものであったことを明らかにした。加えて、江

南の藩帥が自身の栄達を図るため、進奉に専心してしたことを再確認し、江南の藩帥は進奉資金を獲得すべく得度を行なっていたことを解明した。そのうえで、江南の仏教政策が進奉を通じて国家財政と関係していたと論じた。

最後に、江南の仏教政策は江南の藩鎮の特質を大きく反映したものであったとし、唐代藩鎮体制下では、仏教は権威を補強する目的のほか、財源としても利用されていたと結論づけた。

## 真宗における連坐像の展開について

### ―越前の事例を中心として―

大谷大学 下村 優佳

中世社会における浄土教念仏集団の動向として、親鸞を開祖とする浄土真宗の歴史的研究所は、長年にわたりその成果が蓄積されてきた。昨年、『親鸞・初期真宗門流の研究』が刊行されたことで、特に鎌倉末期～室町初期にかけて全国各地に展開した親鸞の門弟やその門弟らを中心とした「門流」に焦点をあてた、現状における研究成果と課題が示された。

各門流は、移動性、掛軸集団、太子信仰といった共通の性格を有し、またそれぞれが個別の集団でありながらも親鸞の門弟というゆるやかな結束のもとで活動していた。この各門流では信仰や礼拝の対象として絵像が制作・依用された。例えば、阿弥陀如来を描く方便法身尊像や、真宗曼荼羅とも称される光明本尊、親鸞およびその門弟らを描いた先徳像、門弟らを系図のように描く一流相承系図（絵系図）などが挙げられるが、本発表では、これらのうち、先徳像、殊に連坐像と呼ばれる図像を検討の対象としたい。

連坐像とは、複数の先徳の姿を連ね描くことで、門流における法脈の相承関係、あるいは特定の人物同士の師資相承関係を表す絵像である。したがって、依用する門流によって描かれる人物や構図が大きく異なる場合も少なくない。本発表では、このように多様な連坐像の中で

も、親鸞面授の門弟である専信坊専海を重視する「専海系三河門流」のうち、「三門徒諸派」で依用された連坐像に焦点を当てたい。三門徒諸派は、越前の南条・今立・丹生郡一帯に展開した集団で、もとは如道を中心とした一つの集団であったものが、複数の系統に分裂し、現在の三門徒派・山元派・出雲路派・誠照寺派それぞれの前身ともなった。これらの集団は、分裂後も、同一の信仰や地域性から相互の交流を継続し擬似同族的な「衆」を形成していたという特色を有する。この「衆」のもと連坐像が制作・依用された事実を踏まえ、連坐像同士の相関関係や共通する特徴について検討していきたい。

## 近世天皇家の追善仏事と延暦寺・園城寺

### ―般舟院における中陰法要を中心に―

京都大学 佐藤 一希

日本近世史研究において、天皇・朝廷と寺院との関係は、主に門跡をめぐる問題が検討されてきた。これに対し、天皇家や公家の仏式祖先祭祀への関心は低調といえ、葬送儀礼を中心に、天皇家の菩提寺としての泉涌寺の位置づけが論じられているもの、追善仏事に着目した研究はほとんど進められてこなかった。こうした状況を受け、報告者は、近年、近世天皇・女院の追善仏事（中陰・年忌法要）に関する基礎的事項の確定を念頭に、十六世紀末から幕末期に至る天皇家追善仏事の通時的変遷について、法要の開催場所・形式に注目して検討を進め、一七世紀後半以降、御所内で開催された宮中法会の開催数が減少し、泉涌寺・般舟院に委任される形の追善仏事が大多数を占めるようになることを明らかにした（拙稿「近世天皇家の追善仏事と泉涌寺・般舟院」『日本研究』第六十五集、二〇二二年）。

般舟院における天皇家の追善仏事は、中陰・年忌法要とともに、御黒戸四箇院（般舟院・二尊院・廬山寺・遣迎院）と延暦寺（山門派）・園城寺（寺門派）から派遣される高僧によって執行されていた。そのなかで、天皇の中陰法要をめぐるのは、元文二年（一七三七）の中御門天皇の中陰法要以降、延暦寺と園城寺との間で争論が頻発する。ここで問題とされたのは、般舟院

における中陰法要で七度行われる御経供養の導師の派遣数と延暦寺僧と園城寺僧の焼香場所の相違についてであった。元文期以降、両寺院は天皇の中陰法要が行われるたびごとに、天台座主・園城寺長吏を介して朝廷への訴えを繰り返しており、幕末に至るまで争論が継続している。天皇家の追善仏事をめぐり、山門派と寺門派が対立の様相をみせたものとして興味深い事例である。

本報告では、近世中後期にかけて、天皇家の中陰法要をめぐり生じた延暦寺と園城寺の争論の経過・裁定を具体的に明らかにする。これらの検討をふまえて、近世天皇家の仏式祖先祭祀における諸宗派による宗教的機能の分掌について考察を深めたい。

## 「宗祖の精神に還れ」と如来教教祖伝の作成

同朋大学仏教文化研究所 石原 和

本報告は、昭和初年に如来教雑誌『このたび』に掲載された教祖伝「教祖の御生涯」を事例として、そこで描かれた教祖像を、当時の如来教教団の動向やその背景にある宗教界の動向と関連づけて論じるものである。

如来教とは、享和二年（一八〇二）、名古屋熱田で元武家奉公人嬭姪如来喜之の神がかりを契機におこった宗派である。明治維新後は、近隣寺院の住職の受持仏堂として、大正二年には曹洞宗の等外寺院として把握されており、仏教系の管理体制の下に置かれた。昭和期になると、後継者問題や帝国議会での第二次宗教法案の審議への対応に追われる。その一環として『このたび』が刊行され、この雑誌の発行者の清水諫見による教祖伝が連載された。

この教祖伝は、近世期のものと比較すると、文献の引用による“実証主義”的方法を採る点や、人格、人間、愛、苦悩がキーワードとする点に特徴がある。実際に、執筆にあたって「口伝と史伝とによつて史実を明らかにすると同時に教祖御一尊様の人格、人間としての教祖を、なるべくはつきりさすことに念慮」したという。

ではなぜこうした特徴を持つに至ったのか。そこには仏教界との連動があった。『このたび』誌上に次のようにある。「一般宗教界ごとに仏教界を展望すれば、宗門各派に於ても積年の弊害を打破し立宗開教の根本に遡つて是正改革に邁進せんとは是れ努めつゝ」あり、その実現に向け

「宗祖の精神に還れの運動」が起こっている。次の記事で、かかる現状を承けて、教団継承者の色が強まっていた如来教について、「教団としては岐路に立たんとしてゐる。教祖の人格教祖の精神に帰れと叫ばれんとしてゐる」との主張が述べられる。その方法として、教祖の人格を描く教祖伝が作成されたのだった。

以上の検討を通じて、仏教界の改革運動と新宗教の改革運動、それに基づく一派独立に向けた思想や手段の連関を明らかにする。それに基づき近代の宗派を超える宗教動向を論じる展望を示す。

## 黒谷流における造寺造仏と戒律復興 — 興円・恵鎮らを中心に —

大津市歴史博物館 鯨井 清隆

鑑真（六八八―七六三）によって日本にもたらされた授戒方軌に対して、最澄（七六二―八二二）は「山家学生式」を定めて、鑑真由来の戒を「小乗戒」として退け、梵網経による「大乘戒」（円頓戒）を提唱した。合わせて、最澄は「山家学生式」や「顕戒論」等により、十二年間の修行を課す。「十二年籠山」を規定したが、時を経ると最澄の気風も薄れ、授（受戒）は形骸化し、十二年籠山も行われなくなっていた。

そのような状況の中で、叡空（？―一七九）に端を発する黒谷流における戒律復興は、興円（一二六二―一三二七）と弟子の恵鎮（一二八一―一三五六）が登場したことにより最盛期を迎えることになる。両者はともに戒律復興を目指し、「戒灌頂」という黒谷独自の授戒方軌を確立した。また、「十二年籠山」の復興、夏安居や布薩といった律院の儀礼などを導入した。興円・恵鎮の教えは、その後元応寺流と法勝寺流という二つの流派によって受け継がれた。そして、応仁の乱などを経て、元応寺流は大津市比叡辻・聖衆来迎寺に、法勝寺流は同坂本の西教寺へとそれぞれ引き継がれている。

令和二年、令和三年に相次いで、発表者が所属する大津市歴史博物館が行った両寺の悉皆調査にもとづき企画展が開催され、元応寺流、法勝寺流に関する新知見を数多く得ることができ

た。その成果は同展図録で紹介したほか、いくつか研究報告する機会を得ることができたが、未だ全容の把握には到底至らない状況である。

そこで本発表では、興円・恵鎮らの戒律復興がどのように行われてきたのかを、主に美術史の観点から考察する。先に発表者は黒谷流で行われている「戒灌頂」という儀礼の中で用いられる「授戒三聖」を中心に考察したが、ここでは、興円・恵鎮らの伝記を参照し、その中でも特に造寺・造仏の記事を抽出し、両者がどのような戒律復興を進めていったのかについて紹介する。さらに、聖衆来迎寺に伝わる元応寺流聖教中の「元応国清寺年中行事」にも着目し、教えを受け継いだ僧たちが行った儀礼生活について復元的に考察を試みたい。

## 敦煌チベット語写本にみる初期の仏教伝道

京都大学 西田 愛

七世紀にチベット史上初の統一国家として中央ユーラシア史の舞台に登場した古代チベット帝国（吐蕃）では、インド、中国、中央アジアなど様々な地域より伝わった仏教が国教となり、国家主導のもと、当時入手可能であった数百の経典が主にサンスクリット語からチベット語へと組織的に翻訳された。また、チベット支配下にあった九世紀前半の敦煌においては、ツェンポ（チベット皇帝）の功德と衆生の安寧を目的とした大規模な写経事業が実施され、漢語およびチベット語の経典が大量に写経された。この写経事業の規模やプロセス、事業の担い手であった写経生たちの実態については、西岡祖秀、上山大俊をはじめとする先学の研究によって早くから日本でも広く知られていたが、近年の研究によってチベット語経典の写経の詳細がさらに明らかになりつつある。一方、国家事業として公的に進められたこれらの翻訳事業および写経事業と並行して、当時のチベット人には馴染みのなかった仏教の概念を平易に説明する「仏教伝道文学作品」もまた、この時代に著作されたことがわかってきた。これらは、中世以降のチベット仏教文献中に伝承されることはなかったが、その具体的な内容を伝える資料が、敦煌出土のチベット語写本群の中に複数残されている。

本発表では、これまでに翻訳を發表した「仏教伝道文学作品」七点について、写本学的観点から、成立年代について論じる。また、各々の作品内容を外観した上で、仏教徒からの批判の

対象となった古代チベットの葬儀について触れ、初期の仏教伝道者たちが仏教を定着させるための糸口とした教えを考察する。これらを総合し、敦煌チベット語写本中に含まれる「仏教伝道文学作品」の著作背景について考えたい。

## 〈宗教改革としての鎌倉新仏教〉言説史への新視点

### ——原勝郎とその後

東北大学　オリオン・クラウタウ

近現代において、「宗教改革」という概念を用いて日本仏教の展開や特徴を描写しようとした一連の言説は、思想界に大きな影響を及ぼしてきた。日本の僧侶の一部は、少なくとも幕末期から、マルティン・ルター（一四八三—一五四六）やジャン・カルヴァン（一五〇九—一五六四）によるヨーロッパの「宗教改革」を自国の事象を説明する上での有効なモデルと見なした。その傾向は一八八〇年代の「文明開化」の枠組みでいっそう強まっていき、この時期以降、日本の思想界から複数の「仏教のルサー」が現れ、これがやがて「新仏教」運動へと繋がっていく。しかし、日本における「宗教改革」というと、人々が思い浮かべるのは十九世紀のこれらの運動よりも、むしろ二十世紀に入ってから展開された原勝郎（一八七一—一九二四）の比較史的試みであろう。原は一九一一年に「東西の宗教改革」という短い論文を発表し、法然や日蓮といった鎌倉期の僧侶の思想をルターやカルヴァンの事業と比較し、日本における鎌倉仏教の意義を、それまでとは異なる視点から再評価した。二十一世紀においても原は、国内外を問わず、ほぼすべての「日本仏教」にまつわる研究的なテキストで「鎌倉新仏教Ⅱ宗教改革」というパラダイムを確立した人物として描かれており、この認識は一種の通説

となつてゐる。原のこの比較宗教史的な発想は、敗戦から現在に至るまで多様な観点から読まれ、ヴェーバー論の影響下で、彼の試みに近代化論への視座を見出す者も存在した。しかし、こうした評価がある一方で、「東西の宗教改革」を精読し、その執筆動機や同時代におけるインパクトを正確に捉えようとする研究は、今日に至るまでほとんど行われていないのが現状である。こうした研究の状況を踏まえ、本報告では、原を取り巻く同時代のコンテキストを検討し、「東西の宗教改革」の意図を考えるとともに、その後世に与えた具体的な影響についても考察する。

## 兀庵普寧書状から見る日宋仏教界の交流と博多・宋海商

国際日本文化研究センター 榎本 渉

本報告では、兀庵普寧（一一九七～一二七六）の新出書状を紹介し、その内容を分析する。兀庵普寧は南宋四川の人で、臨濟宗の僧である。一二六〇年に来日し、鎌倉建長寺で住持を務めたが、外護者である北条時頼の死後、一二六五年に帰国した。帰国後の兀庵が宋から送った書状や法語の現物や写しは複数伝わり、兀庵が日本の知人たちと連絡を取り続けたことを知ることができる。今回紹介する兀庵書状もその一つで、原本ではなく写しと考えられる。日付は咸淳四年（一二六八）一二月である。宛先は書かれていないが、博多に拠点を持ち筑前国首羅山を中興した悟空敬念（一二一七～七二）と考えられる。

悟空がいた博多は日宋貿易船の発着地であり、日宋交流に関わる人々との接触の機会が多かった。そのため兀庵書状からは、従来知られていなかった入宋僧や宋海商の活動を知ることができる。兀庵には京都で活動した弟子、東巖慧安（一二二五～七七）がおり、頻繁に連絡を取ったことが知られていたが、兀庵書状からは東巖と悟空が弟子を一緒に入宋させ、兀庵と連絡を取ったことが分かる。東巖が京都から兀庵と連絡を取る際には、博多の悟空が仲介役として協力したと見られる。

また近年、悟空が中興した首羅山の発掘が進み、十三世紀半ばに薩摩塔・宋風獅子等を備えた宋風伽藍が作り出されたことが明らかになっているが、兀庵書状はその背後に悟空と宋海商

の関係があった可能性を示している。さらに注目されるのは、兀庵書状に現れる宋海商の一人が、十数年後の蒙古襲来期にも博多・大宰府の禅宗寺院に出入りしていたことである。博多の宋海商は一二六〇年代以後文献で確認できなくなると言われてきたが、兀庵書状は彼らのその後の動向について新たな情報を加える史料ということもできる。